

ハイント

和田 緑

キッチンからただよう甘ったるいにおいにたえられなくて、とうとうぼくは家を飛び出した。母さんがぼくを呼び止める声が聞こえたらたまらないので、全速力で走った。コンクリートをけりあげるたびに、心臓がおおげさなくらい胸を叩く。確かにぼくは学校でも体力がある方ではないけれど、今はたぶん、もっと違うところが悲鳴をあげているのだと思った。

気付いたときには、ぼくは母さんとふたり暮らしで、それが当たり前だった。小さい頃はわからなかったけれど、「父親」という存在がぼくには欠けているということを、ぼくはもう、ちゃんと知っている。だってぼくは、もう四年生なんだ。母さんと父さん（顔も知らないのにそう呼ぶのはなんだか変な気分だ）が離婚したってことくらい、わからないはずがない。

それでも母さんは、ぼくが一番気になっている「離婚の理由」について、話してくれる気はないらしい。

ぼくの父さんのことなんだから、知っておく権利はあるはずなのに。

「もう少し大きくなったら、説明するからね」

つまり、まだ四年生のぼくには話しても無駄、ということだ。ぼくにはまだ、なにもわからないと、母さんは思っている。なんておかしな話だろう。なにもわかっていないのは、母さんなのに。

母さんはなにもわかつちやいないんだ。ぼくの世間で一番きらいな食べ物のが甘いお菓子だつてことも知らないで、母さんは毎日食卓にクッキーやケーキを準備する。今日はプリンだった。最悪だ。

毎日学校から帰って、ぼくがどんな気持ちになると思う。お菓子の横にそえられたメッセージカードに「食べ終わったら歯をみがくのよ」と書いてあるのを見て、どれだけうんざりすると思う。

今日はそのうんざりが、頂点に達する日だ。

友達はみんな誕生日が近付くとそわそわし出して、プレゼントはゲームを買ってもらうんだとか、

高級レストランで食事をするんだとか、聞いてもいないのに口々に語る。そんなときぼくは、どうしてこんなに違うのかと泣きたい気持ちになる。だって、だってぼくは、今まで一度だって誕生日を嬉しく感じたことはないんだから。

ぼくの誕生日といえば、普段とは比べものにならないくらい甘いお菓子がテーブルを埋めつくす。ただそれだけだ。他になんの印象もない。ただ苦しいだけの日。

いくらぼくが特製バースデイケーキに全く手を付かずに残したって、母さんは翌年の同じ日もまた決まってキッチンで生クリームを泡立てるんだ。泡だて器がボールとぶつかる音を聞くだけでぼくが気持ち悪くなるなんて、きつと考えもしないで。

今まではたえてきたけれど、ついにぼくは今日、爆発した。だってあまりにも甘いにおいがうるさかったから。それに、お菓子を見るたびに母さんがぼくをなにひとつわかつていないということがリアルになる気がして。

さんざん走って、ぼくは普段あまり来ることのない河川敷でようやく立ち止まった。ぜえぜえと肩で息をして、あとからあとから流れ出るひたいの汗をシャツの袖でぬぐった。首のうしろにはりついた髪が気持ち悪い。せっかく目の前に川があるんだから、さっぱりしたいと思っただけれど、ぼくはこの川が汚くて深いことを知っている。だからそんなばかなこととはしないんだ。

やっと落ちて息が吸えるようになったとき、ぼくのうしろの方から足音が聞こえた。ぼくは思わ

ずびくりとして、母さんが追いかけて来たのかとあせったけれど、それは母さんではなかった。

そのひとは母さんよりずっと年上の男のひとで（白髪がたくさん混じっているから、絶対そうだ）、鼻の下とあごにひげを生やしていた。おしゃれのつもりなのかもしれないけれど、ぼくからしたらだらしがないと思えない。しかもだらだらに伸びきった、いかにもおじさんくさい茶色いコートと端のすり切れたジーンズをはいていて、足元はなんとトイレに置いてあるようなサンダルだった。その時点でそのひとの印象は最低に近かった。

そのひとはぼくがじろじろ観察しているのを気にもしないで、どっかりと地べたに腰を下ろした。そして信じられないことに、両手にはバケツと釣竿を持っていた。ぼくは目を見開いた。さっきもいったけれど、この川は汚いから、魚なんていない。このものぼくでも知っていることを、こんな大人が知らないはずがないのに。

ぼくの驚きなんて全くお構いなしに、そのひとは自然な動作で釣り糸をたらしした。間違いない。この川で釣りをする気だ。

あんまりぼくがしつこく視線を送っていたからか、そのひとはついにぼくを横目でちらりと見やった。細い目の下には小さなしわが何本もきざまれていた。ぼくはどきりとしたけれど、そのひとは特になにか喋ることもなく、じつとぼくを見つめた。ぼくは恐る恐る口を開いた。

「……おじさん」

「なんだ」

「この川に魚はいないよ。だってこんなに汚いし」
「見ればわかるぞ」

あっさりとした返答に、ぼくはまた驚いてあぐりと口を開けた。わかっているのに、どうして釣りをしていなのだろう。全く意味がわからない。不思議そうなおじさんに気がついたのか、そのひとは一呼吸おいてから「魚を獲るためだけにするんじゃないやあないんだ。釣りってのは」と、まるでひとりごとのよう

につぶやいた。男のひとらしい、だけど少しかすれた声だった。

その言葉の意味はやっぱり少しもわからなかったけれど、ぼくはなんとなくおじさん（今度からそう呼ぶことにする。そのひと、じゃ、あんまりだし）の隣に腰をおろして、その意味不明な行為を眺めることにした。隣とはいっても、ちょっと距離を置いて。

おじさんはぼくと会話する気はないらしく、うすい唇をきゅつと引き結んだままにごった川を見つめている。ぼくからしてみればこんなに退屈で奇妙なことはないのだけれど、なぜか居心地は悪くなかった。少なくとも、甘すぎる家のなかよりはよっぽどまじだ。

そう思ったとき、ぼくはまた母さんのことを思い出した。きつとぼくが家に帰ったら、生クリームやチョコレートでデコレーションされた大きなケーキが待っているんだろう。全くいやになる。ちら、と、甘いものとは縁の遠そうなおじさんの横顔を盗み見る。相変わらず細い目には川しか映っていない。ぼくは自分でも不思議だけれど、自然とおじさんに声をかけていた。

「おじさん、甘いものは好き？」

「おれがチョコレートバーをうまそうに食うと思うか」

「思わない。似合わないしね」

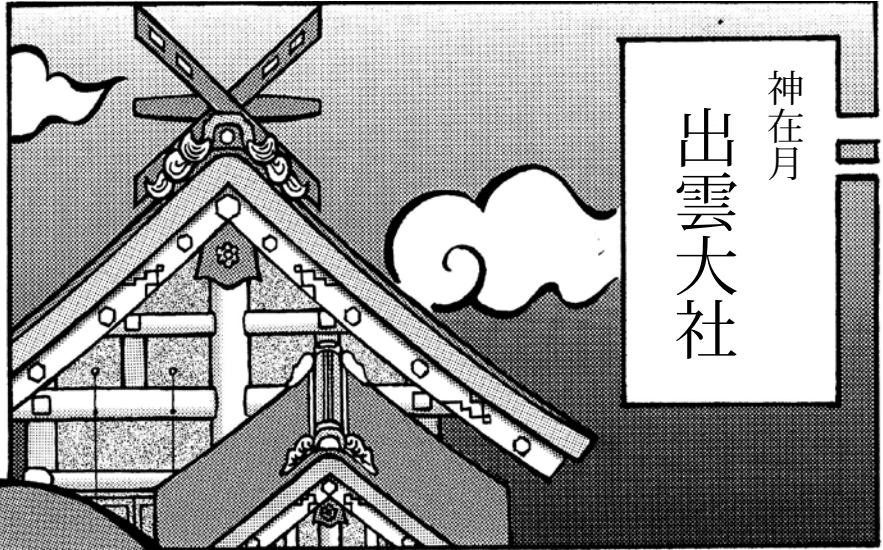
「あんなのは女こどもの食うもんさ」



Saori

縁結び

mini うさぎ



神在月
出雲大社

そっか
お前は会議に関わるの
今年が初めてなんかあ

大国主命の長子
ことしろぬしのかみ
事代主神

あゝあ
何で僕が
縁結び会議に出席しなざる
全国の神様たちを
もてなさんといけんだあ？
しかも踊りで…

大国主命の次子
たけみなかたのかみ
建御名方神



…父上は
偉大な方だよ

自分が主催する行事
だからって
息子である僕たちが
使われる…
…父上なんて嫌いだ



大国主命。

出雲神話の主人公であり、

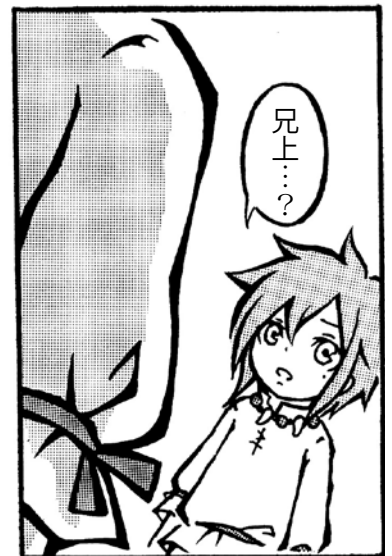
出雲大社の祭神。

縁結びの神として

名高い。

全国の神々が集う大行事
縁結び会議の主催者…。

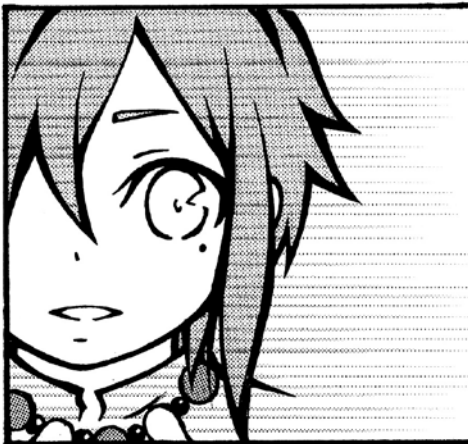
縁結びなんか
興味はない…





全国の神様方が悩みに悩んで
お決めになった二人の
幸せそうな姿を見たとき、
とっっても嬉しかった…

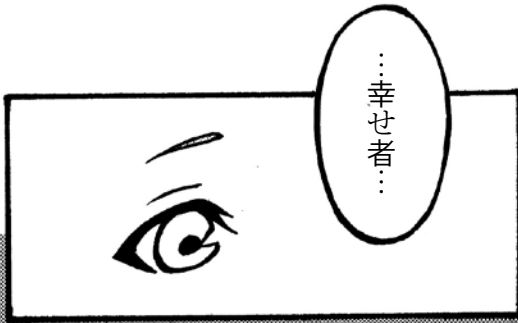
その時
人々を幸せにする縁結び会議、
その会議に出席なさる神様方を
もてなすことができる俺って
すごく幸せ者なんだってことに気付いたんだ





ほら！
俺ら幸せ者だがあ？

だけん
踊り
頑張らや！



…幸せ者…

兄上、僕踊り
精一杯頑張るよ！



出雲の地へ
ようこそおいで
くださいました

縁結びの審議が
はかどりますよう
願いを込めて

皆様に踊りを
捧げたいと
存じます



兄上の言葉は
僕を変えた

僕たちの踊りが
審議にどんな影響を
与えるかはわからない

だけど

神々、人々のために
より良い会議に
なってくれることを願って
僕は踊り続けたい

大国主命の息子として
ではなく
建御名方神として…



終

白谷達也・写真 古澤陽子・文

唐川びとへ

精霊たちの庭
出雲・唐川

2009年2月
ラトルズ
2,400円+税

評 飯島久美子



出雲市河下町より三キロ。唐川町はそんな近くに近かったのか？と半信半疑のまま車を走らせた。私が訪ねた出雲市唐川町は、お茶の産地で知られる山深い里。と言っても私が唐川町を知ったのは、本屋さんが見計らいで持ってきた『唐川びとへ』という本を見、その出版記念に開かれた写真展に行つてからだ。

秋の紅葉で名高い鱒淵寺とは反対方向に、車は薄暗いカーブを登つて行つた。途中、採石場があつたり、かつての銅採掘で使用したトロッコの橋脚だけが巨大な墓標のように残つていたり、写真で見ただのどかな唐川の姿とは相反する光景だった。

沢の音を聞きながら緑のトンネルを抜けると、「どなりのトトロ」に出てきそうなバス停があつた。その先に、目的の唐川が広がつていた。

唐川は、午後の光に包まれて、さっきまでの鬱蒼とした山道が嘘のようだった。山々に囲まれて……と言うか、山に守られているような土地だった。写真で見たとおり、茶畑が広がっていた。思ったよりもこぢんまりとした集落だと思つた。この小さな集落に、四季折々の営みがあつて、写真にあつたように賑やかな祭りがあるのかなと思うほど、静かな日曜の午後だった。

折角来たから写真でも撮つて帰ろうと思うのだが、山深い里に場違いな私。五月三十一日の新茶祭りに来れば良かったと、今更後悔。でもこれから梅雨が本格

化するれば、いつまた来られるか分からないと自分を奮い立たせ、茶畑をパチリ。そそくさと車まで戻ると、先ほど撮影した茶畑のすぐ横で、農作業をしておられる第一町人発見。ここで帰れば女が廢ると、勇気を出してインタビュー。

「あの一、お話うかがつてもいいですか？」とカメラ片手に観光客を装つて聞いてみた。

「はい、どうぞどうぞ。汗だくでじゃがいもを掘つていたおじいさんは、快く話してくれた。

「お茶はもう終わつたんですか？」

「はい、新茶はこないだ終わつたけども、こーから二番茶や番茶だけんねー。

秋には番茶祭りもあーよ」

おつ、秋も来なければ。

「なんか、この二列だけ枯れているみたいなんですけど？」

「こーわねー、だいなーす。ててねー、二、三年にいつぺんこげすーと、葉の勢いが違ーですが」

「？……。第七種ですか？」

「だいなーす。ててゆーが。台をならす。て意味だげな」

「あ、台ならしですかー！」と、雲州平田の会話をしみながら、お茶について学んだ。「お茶をつくーはずめたんは明治の頃だども、出雲国風土記にこの韓竈神社^{かんか}でて神社も載つちよつて、昔から人が住んじよつたげなよ」と、唐川の歴史もすらすらと教えてくださった。なぜこんな山奥でお茶の栽培が始まっ

たのだろうか？と思つたが、調べてみると、「排水良好な山地の傾斜地が、山陰となつて、日照時間がやや短くなる点が、良質の茶の生産を可能にしている」とのこと。なるほど。

それにしても唐川は調べれば調べるほど面白い。韓竈神社の韓竈は「韓式溶鉱炉の神の社」とする説がある。「国来、^{くにき}国来」と新羅の国から引つ張つて繋ぎ合わせたとされる島根半島。『唐川びと』を眺めながら、唐川の今と昔に思いを馳せる。ぬるめのお湯で濃く入れた唐川茶を飲みながら。

(いじま・くみこ/本学図書館司書)

参考文献

- (1) 『平田市誌』(復刻版) 一九九四年、四二・四三頁。
- (2) 速水保孝「青銅器原料の産地論争」『そうけん情報』VOL.2 (一九九〇年八月) 八頁。



■左奥が「台ならし」中のお茶の木。